# 少年の異世界戦記～ＩＳ編～

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記～ＩＳ編～

【Ｎコード】

Ｎ７０７１Ｙ

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

次に渡った世界はインフィニットストラトス通称ＩＳと呼ばれる汎用性の高い人が着るパワードスーツがある世界であった。

## 0話（前書き）

友達に薦められた小説やアニメを見て創作意欲に任せて書きました。
この小説内で一部のキャラクターの性格が違うと思いますが嫌な方
はクリアバックを推奨致します。

# 0話

ーーーＩＳ学園第一アリーナーーー

《これより入試実技試験を始めます。受験者は対戦相手を量産機又は専用機を用いて戦って下さい。》

「わたしが試験官とはな…相手には悪いが本気で行かせて貰うか」

ピットの中にある侍をモチーフにした感じの機械の前に佇むのは切れ長の瞳に長身でモデル顔負けのプロポーションと美貌を持ち、黒い髪を腰元まで伸ばした女性が学園指定の教員用ＩＳスーツに身を包んで立っていた。

「ちーちゃんが本気を出したら入試の子が可哀想だね～？」

そしてその女性の傍らに立つのはメイドドレスに身を包むピンクの長髪を持つ同い年の様な女性……頭の上…カチューシャと思われる兎耳がひとりでに動いているのは謎である。

「束が他人に興味を持つとは昔は考えられなかったな」

ちーちゃんと呼ばれた女性は感慨深く傍らに立つ女性…束と呼んだ人物に昔の事を喋る

「それはやっぱり〈あの人〉のお蔭かな？」

「いま頃何処で何をしているのだろうな……」

女性はＩＳ越しに遠くを見つめる様にしていた。果たして女性は何を見ていたのかは傍らに立つ束にしか解らない。

「この六年間ずっと探しているけど行方知れずだからね」

「（第二回モンドグロッソ世界大会の時に誘拐された一夏の近くにいた人の証言が正しければ金髪の血の様な瞳を持った人物はわたしは１人しか知らない）そうだな。」

「二回目のモンドグロッソの時にいっくんを見つけた時にあの人かと思ったけどちーちゃんはどう思う？」

「（同じ事を考えていたようだな）確証がなければ何とも言えないな……打鉄の用意は？」

「準備完了してるよ～♪ちーちゃんが思い切り動かしても壊れないから安心して良いよ～♪」

「いつも束の腕の事は信頼している」

「ちーちゃんそれは酷いよ～（泣）」

「あぁもう！引っ付くな！次の受験者はわたしが受け持つんだぞ！」

《織斑先生、受験者の準備が整いました。》

「解った。山田先生受験者のＩＳ情報は？」

《それが……》

女性の声に通信をしてきた山田先生と呼ばれた女性はどう答えていいか戸惑っていた。

「どうした？」

《受験者のＩＳ情報ですが六年前に世間を騒がした機体なんです。》

「……ヴェルフェゴール」

「７つの大罪を犯した悪魔の名前で六年前の〈あの事件〉の時に束さん達が表だとすれば裏で動いていたとされた機体の名前だね。（そしてあの人が乗っていた機体でもあるんだよね？…でも六年経ったいまになって現れたのかな？）」

《御存知でしたか？》

「まぁ…な。あの時の当事者だからな」

《そうですか。》

「機体の情報はあるのか？」

《あ…はい！あります！機体名はヴェルフェゴールで拡張領域や後付け装備が無い事や操縦者を生命（いのち）の危険から守る絶対防御機能が無いなどと慨存するどのＩＳとも違う設計です。装備数はかなりの量なので織斑先生のＩＳに直接送ります》

「解った。山田先生、準備が出来たら合図を頼む。」

《わかりました。》

そして片膝を着いている打鉄のコクピットの様な座席に座る様にして女性が座ると体を固定或いは纏うかの様にして体の肩や脇腹などに機械が取り付けられる。

「ちーちゃん、気を付けてね？もしかしたら」

「解っている。例え相手が〈あの人〉であったとしても手を抜いたりしたら怒られてしまうからな…」

《織斑先生お願いします》

「解った。束は下がってろ」

「は～い♪」

ＩＳを纏った女性の傍から束は素早く離れるのを見てピットに設置されているカタパルトに乗って飛び出した。

「あれか。（全身装甲型（フルスキン タイプ）とは益々持って〈あの人〉を思い出してしまうな。）」

ピットから飛び出した女性の視界に最初に目に入ったのは全身を完全にＩＳで身を包んだ機体見る人物に恐怖感を煽る様な風貌…そして一番の特徴は鬼を模して作られた顔に全身が真紅に塗り潰されている事と背中に背負った形でカーキ色の二枚の巨大な盾である。

「受験者番号２００１番所定の位置に着いたな…今回お前の試験官を勤める事になった織斑千冬だ遠慮は無用だ。全力で掛かって来い

！（もし〈あの人〉なら確実に初手は遠距離からの攻撃の筈……）」

そして女性…ちーちゃんこと織斑千冬と名乗った女性の予想道理に相手は片手に持った突撃銃を乱射して接近してきた。

「（銃撃は囮…本命は）そこだ！」

千冬は誰もいない空間に打鉄に装備されている刀を振るうと甲高い金属音が鳴る。

「不可視の刀を使う事など解っている！」

千冬は相手の刀を切り払ってその勢いに任せて返しに逆袈裟に斬りつけるがその真紅の装甲には傷一つ着けられなかった。

「装甲は昔と同じか！」

千冬はそのまま距離を取ろうとした瞬間（とき）打鉄が動かなくなってしまう。

「なにっ！？」

『禍ノ生太刀（マガノイクタチ）』

何故か身動きが取れない打鉄に対して相手は掌を打鉄の肩に添えると打鉄のエネルギーゲージが急激な減少を始め、あっと言う間に０にされてしまった。

《じゅ、受験者番号２００１番の勝利です！両者は所定のピットに

戻って下さい》

「一体なにが起きたのだ？」

わたしが考え事をしといると相手が手元を何かを振る動作をすると纏わりついていた何かから打鉄が解放されたのを感覚で感じはっと我に帰ると相手はわたしに背を向けてピットに戻って行く最中であった。

「相手の素顔が確認出来なかったがあの戦い方……やはり貴方なのですか…戒翔さん」

千冬は真紅の機体にか細い声で喋ったがその真紅の機体は何も答えてはくれなかった

## 0話（後書き）

御意見や御感想をお待ちしております。

## 第一話　再会の時

ある学園に俺こと黒逸戒翔は神界からこのＩＳの世界にスカリエッティの調査依頼の為に現界していた。……其処までは良い。

『何故、こうなったυ』

「それは俺も同感ですυ」

俺ともう一人の男子…織斑一夏。どうやらコイツは入試の時にＩＳ（インフィニットストラトス）を作動させてしまった事によりこのＩＳ学園に入学する羽目になっていた。

俺が何故この様な所にいるかと言うと…あの変態科学者の提案に乗ったのがいけなかったと言うのが一番の後悔であった。で、何故後悔していると言うと……

（男子２人に対して他の面子が全員女子ってどんだけだよυ）

と、俺が思考にふけていると隣から何かを殴る音が聞こえ其方に目をやるとうずくまる織斑とその傍らに殴ったと思われる黒いスーツを身に纏った女性が立っていた。

「学園内では織斑先生と呼べ」

そう言って織斑と言った女性は副担任の山田真耶の横に立つ。

「これからお前達を鍛えていく、織斑千冬だ。この３年間で使い物になる様に鍛えていくつもりだ。出来なくとも返事をしろ！」

「「はい！」」

そして、その後に続く自己紹介で……

「……以上です！」

まぁ、普通に自己紹介した織斑に対して周りは滑っていたのはスルーしておこう。そして……

「黒逸戒翔くん。」

山田真耶先生に呼ばれて俺は返事をした後に席を立つとクラスの視線が一気に集まるのを感じる。

『黒逸戒翔だ。諸事情によりこのＩＳ学園に来たが解らない事も多々あるが宜しくお願いします。』

「えっと、戒翔くんは専用機を持っているって聞きますが何を持っているんですか？」

『専用機って言うよりはオリジナルに近い物ですね。自身の理論を使ってＩＳとは違う核（こあ）を使っていますからね。ただ、それを教えろとか強要するのであれば抵抗させていただきますが……』

その事に先程までオリジナルのＩＳを持っている事に騒いでいたクラスが沈と静まる。

「いえいえ、篠ノ乃束博士以外に自身で開発した事が本当かどうか知りたかっただけですから」

『それだけなら良い…。』

そして俺が席に座ると織斑から声を掛けてきた。

「やっぱり、戒翔は独学でＩＳを作ったんだな？」

『やっぱり？後は今度教えてやるから取り敢えず……』

「取り敢えず？」

「前を向け…この馬鹿者が」

そして織斑が前を向いた瞬間、呻き声と共に席から落ちる。

「生徒が自己紹介している最中に無駄話とは良い度胸だな……」

「ご、ごめん。千冬姉」

「学園内では織斑先生だ。」

それ以降は無事にクラスの自己紹介が終わり、織斑教諭が教壇の前に立ち口を開く。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そう言った瞬間、クラスの俺と同じく男である一夏を残して他の女子達が黄色い声を叫び教室内に木霊した。

「はぁ、何故わたしのクラスにはこうも馬鹿ばかり集まるのだυなにか？わたしの所には馬鹿ばかりが集まる様になっていると言うのか？」

そんな織斑教諭の言葉は絶叫と言うか悲鳴に近い声にかき消されてしまう。織斑教諭心中お察しするよυ

そして休み時間の時…。

「そこのお二方、少しよろしくて？」

「はい？」

『ん？』

「このセシリア・オルコットが話し掛けたのになんて気の抜けた返事をするの！？」

「いや、俺知らないし…戒翔は？」

『俺も知らないな……』

「学園主席合格でイギリス代表候補生のこの私を知らないですって！？」

「ごめん…」

『まったくと言って知らないな……』

「なっ！？」

セシリアと言う女生徒が驚愕を露わにしている時、神界からの通信が入った為に懐から携帯を出す。

『すまん、電話だ。』

そして、窓際に移動すると携帯を耳に当てながら通信を開く。

《やぁ、其方の世界はどうかな？》

『そこそこ面白いがやはり面倒だな…。お前はこんな世界（ところ）で何を調べたいんだ？』

《なに、その世界のＩＳの技術に興味があってね？君の使っているデバイスとは違う意味で面白いと思ったからだよ？》

『まったく、無限の欲望（アンリミテッドデザイア）……コードネーム通りの思考だな？』

呆れを含む声にスカリエッティは気にしないとばかりに笑う。

《意味合いをそのまま体現出来るのはわたし位だろうね？クローンとしても科学者としてもね？》

『何か解れば此方から連絡を入れる。』

《わかっ……あぁ、そう言えば其方の世界に空間の歪みを観測したからね？そっちの方も取り敢えずは気に掛けて置いてくれるかね？》

『歪み？』

訝しげに聞くとスカリエッティは真剣身を帯びた声でそれに答える。

《何者か解らないが何らかの干渉をして来たと見て良いだろうね。》

『そうか…。取り敢えず、その件に関しては此方でも調べるが、何か新しく解れば連絡をくれ。もしかしたら転生者かも知れないな…。』

《わかったよ。それじゃ、誰かその件での捜査要員で派遣した方が良いかも知れないね？》

スカリエッティの言葉に暫し思考に入る。

『……冷静さと機械に精通している奴と考えるとなると……なのは、フェイト辺りが良いかも知れないな…。』

《確かに……彼女達のどちらかを送った方が君としても動きやすいだろうね？彼女達のどちらかを送る時には連絡を入れる事にするよ。ただ、高町…いや、今は君の奥さんだったね？彼女の悪い癖みたいな物が出ないと良いね？》

『不安要素の１つを言わないでくれぃ』

《ふふふ、ではまた。時の守護神、黒逸戒翔君。》

そして通信が切れるのと同時に携帯を懐にしまうと先程から此方を

睨み付けていたセシリアがズンズンと擬音が付きそうな足取りで此方に近付いて来る。

『はぁ、面倒なのに目を付けられたなぅ』

「そこの貴方……」

そして、セシリアが口を開いた瞬間、始業の鐘が鳴る。

『残念だったね？セシリア・オルコットさん。』

「〜〜〜〜後日改めさせて貰いますわ！！！」

セシリアの言葉を背に受けながら俺は席に着く。傍らには俺が通信中、ずっとセシリアと話していたのか机にぐったりと横たわる一夏がいた。

『……大丈夫か？』

「だ、大丈夫。こんな所でへこたれてたら……地獄が……」

『なんだそれ？』

「あ、いや…何でもないよ？」

『……そうか？』

一夏の言葉に違和感を覚えながらも一応警戒はして置いた方が良いかも知れないな…。杞憂に終われば良いが……

その後も何の問題も無く授業は進んで行き、寮へと向かったが……

『女子ばかりだから当たり前…か。』

決められた部屋へ行く道程には至る所に女子、女子、女子と遭遇するばかりである。

『此処…か。』

俺はそのまま入ると2人部屋の様で同室の人間は既に帰って来ている様子でベッドの傍らに竹刀と木刀が突っ込んである鞄が置いてあった。

『剣道…か。』

それを眺めていると……

「誰かいるのか？私は篠ノ乃箒だ…この様な姿で……」

『此処の寮室になった黒逸戒…翔だっ！？』

「……なっ、何で男が居るんだ！？」

『何でって俺はこの部屋だからって…』

そして、その篠ノ乃箒と言う女生徒の方に振り向いた。……それがいけなかったのだろう。

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

少女は羞恥のあまりに限界を超えた力で戒翔の水月…鳩尾に拳をもらい仰向けに倒れる。
そして、戒翔が最後に見たのは自身で殴った事に対してなのか防ぐなり避けるなりしなかった戒翔に対してかは解らないが驚愕の表情になっていたのであった。

『（まぁ、女子しかいないと言う事を忘れた俺が悪いからな…。）』

戒翔はそんな事を考えながら意識を闇に落とすのであった。

ーーーｓｉｄｅ箒ーーー

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

わたしは恥ずかしさの余りに全力で男に人体の急所の１つである水月…鳩尾を咄嗟的に殴ってしまった。

「えっ！？」

相手が防ぐか避けるだろうと思っていたが相手の男はそのどれも行動に取らずに素直にわたしの拳を腹にうけるとそのまま仰向けになり昏倒してしまった。男の容姿を確認したわたしは驚愕した。

「な、何故戒翔兄さんがいるのだ？」

わたしの問い掛けは気絶させてしまった戒翔兄さんには無意味な物だがそれをせずに居られなかった。ＩＳならいざしらず肉体面では戒翔兄さんがわたしの拳などどうとでも出来た筈だから……

「と、取り敢えず着替えるとしよう／／／／」

冷静になって考えると今の自分の格好はタオル一枚を体に巻いた状態な事に気付き慌てて着替えの胴着に着替える事にする。気絶させた事は悪いがわたしもこのままではまた同じ事に成りかねないと思ったからだ。

そして、着替え終わって手持ち無沙汰に戒翔兄さんが目を覚ますのを待ちながらわたしはその様子を見ていた。

「髪は金髪に目鼻も整っているし、殴った時に感じた筋肉質な体……それに全てを魅入られさせる様な紅と蒼色のオッドアイに落ち着いた物腰…包容力があって理想的な男性としては……ってわたしは何をしているんだぁーー！？／／／／／／／／」

そんな事をしていると気絶させてしまった戒翔兄さんが目を覚ました。

『う……』

「だ、大丈夫か？」

目を覚ました戒翔兄さんにわたしは咄嗟とはいえ、殴ってしまった

事による後ろめたさにどもってしまう。

『いや、大丈夫だ。それに殴られても仕方ないからな…。』

「そ、そうだ！わたしの入浴上がりの姿を見たのだからな！……でも戒翔兄さんなら」

『それは悪いと思っている。元々が女子ばかりだと言う事を忘れていた俺が悪いからな…。それと最後の方が聞こえなかったが何か言ったか？』

わたしの言葉に戒翔兄さんは自分の非を潔く認め、謝罪をしてくる。

「しかし、何故戒翔兄さんと同室なのだ？男女七歳にして同衾せずだと言うのに……」

『それは俺にも解らない…。箒は見ない内に可愛くなったな…。』

「なっ！？／／／／／／／／きゅ、急に何を言い出す！」

『すまん、すまん。先ずは入浴などの時間の割り振りを決めないとだな…。』

戒翔の言葉にわたしも同意見な為に異論はなかった。

「まず、わたしの入浴時間が部活を終えてからになるから7時から8時まで、そして戒翔兄さんの入浴時間が8時から9時だ。」

『部活は剣道か？』

「わたしの目標は戒翔兄さんみたいに強くなる事ですから」

『俺が目標？（やはり記憶にないだけで俺と言う存在がＩＳ世界の一部の人間の中には俺を知る人間が何人か存在している様だな…。）』

戒翔兄さんはわたしの部活を聞くと少し考えている素振りを見せるとわたしの顔を見ると意外な言葉を発してきた。

『その剣道の見学に行っても良いか？』

「戒翔兄さんが？」

『まぁ、な。剣術を嗜んでいるから剣道だとどう違うのか気になってな？』

「剣術って、戒翔兄さんが昔に千冬さんに教えていた？」

『まぁ…そうだな。』

「戒翔兄さんは剣を握る時の心構えと言う物はなんですか？」

『自身を最強たるな常に最高であれ…。』

「戒翔兄さんが良く千冬さんに言っていましたね」

『あぁ、自身の力に傲らず更なる高見を目指す…そんな意味合いを持っているからな。』

そして戒翔は首下から剣状のペンダントを……

「それは戒翔兄さんの専用ＩＳ？」

『ん？そうだが、それがどうしたんだ？ＩＳは皆持っているだろう？』

「専用機は全員が持っている訳ではないんです。極僅かのそれも選び抜かれた者しか持てない希少な物だ。ましてや自作でＩＳを造ったなどと姉さんですら核（コア）のみで他の部分は他の国で作っていたんですよ！」

『其処まで驚く事か？やろうと思えば核（コア）は他の国がどうかは知らないが俺は既に束から教えてもらっていたからな…後はその仕組みを他の管制ユニットとジェネレーターの複合型に仕様を変更して他の物は慨存の技術の枠から外れてはいるな？』

「戒翔兄さんには驚かされ過ぎて反応に困りますよ」

『基本理論もしっかりしてはいるし何重にも張った強固な防御（プロテクト）がされているから俺のＩＳを調べられても問題はない…。』

「もうなんて言って良いか解りませんよ」

『ま、詳しい話は後にして明日に備えて寝るか。』

「そうですね。」

『「お休み。（なさい。）」』

そして二人はそれぞれの寝台に入り眠るのであった。

## 第二話　敵の襲来？いや憑かれただけｕ（前書き）

今回の話で神話に出てくる悪魔をモデルとしたキャラクターが出て来ますが詳細の設定が未定ですのでこの回に出て来るキャラクターの名前とその詳細の応募をしたいと思います。期限は特に決めませんのでお願い致しますｍ（＿＿）ｍ

## 第二話　敵の襲来？いや憑かれただけυ

『クラス代表戦？』

「あぁ、各クラスの代表同士で戦ってクラスＮｏ．１を決める物だ。」

『へぇ、クラス対抗戦をＩＳを使っての大掛かりな物にした物か。』

翌日の朝、戒翔と箒は同じテーブルで朝食を取っていた。そこへ……

「ねぇねぇ、あの男の子が噂の自作のＩＳを持った子？」

「かなりイケメンだね♪」

「あっ！だからって抜け駆けは駄目だよ？」

「篠ノ乃さんとどういう関係何だろうね？親しそうな感じだけど…」

周りでは昨日の続きとばかりに女の子達が戒翔と箒…主にその注目は戒翔と少し離れた場所で朝食を寂しく取っていた一夏に注がれていた。

『まったく、見世物では無いのだがな…。』

「仕方ない事だ。男でＩＳを使える戒翔と一夏はわたし達に取っては珍しい存在なのだからな？」

『それはそうだが…』

「く、黒逸君隣良いかな？」

『ん？別に良いぞ、席を占領してる訳では無いからな。』

戒翔と箒が朝食を取りながら雑談をしていると3人の女生徒が戒翔へと話し掛けてくる。その様子を見ていた他の女生徒達がなにやら騒ぎ出した。

「黒逸君って朝からそんなに食べるんだね？」

「や、やっぱり男の子だからかな？」

『そいつは偏見と言うものだ。男でも少食な奴もいれば女でも大食らいの奴がいるのだからな……まぁ、俺は結構食べる方だな。』

「黒逸君の話し方って少し難しく感じるね？」

『済まんな。どうも知り合いに科学者がいるもので論理的に考え、喋る節があるみたいでな？』

「へぇ～、そうなんだ。その人ってどんな人なの？」

『そうだな……一言で言えば変人だ。』

「へ、変人？」

『だが、アイツは天才だ…今ある技術の最先端を1人で作る事も可能でこのオリジナルＩＳの二機も基本理論をアイツとの共同で制作したのだからな。』

「凄いんだね？」

『性格には多少の難があるが信頼をしているからな…。』

「ほぇ～。」

戒翔がスカリエッティの事を話していると食堂の真ん中に織斑千が現れ、号令を掛けていた。

『ふむ、そろそろ行くか。』

「「「食べるの早っ！？」」」

『普通だろ？』

「いやいや！？普通はもっと時間が掛かるよ！？」

『そんな事よりも早くしないと余計に拙い事になるぞ？』

戒翔が席を立ち部屋に戻る所に一夏が廊下の隅の所に立っていた。

『どうした一夏？もうすぐ登校の時間になるが支度は出来ているのか？』

「いや、戒翔兄がなんでこの学園にいるのかを聞きたかったから待っていたんだ。」

『俺が此処にいる理由？』

「俺は良いんだけど、６年間も音沙汰無しで千冬姉や箒に束さんがどれだけ心配したか解ってるか？」

『（一夏の証言からして俺は過去に存在し彼女達とは深い関わり合いがあったと言う事か…）そうか…それは済まない事をしたな…。』

「戒翔兄さん、こんな所で立ち止まってどうしたのだ？」

『いや、何でもない。早く行くか？』

「当たり前です」

そして、部屋に戻って着替えを済ませ、一夏を入れた3人で寮から出て、真っ直ぐ学園に向かった。

－－－ＩＳ学園１－１－－－

「今日の時間は昨日言い忘れていたのだが、再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決める。クラス代表者に推薦したい者がいるならば言え。また、立候補でも構わん。」

ＳＨＲにて織斑教諭が開口一番に言った言葉に周りはざわめきだす。

「クラス代表者とは意味はそのままでクラスの委員長で生徒会の開く会議やその他の委員会への出席…まぁ、簡単に言えばクラス長と言う事だ。そして、クラス対抗戦とは入学時点での実力推移を測るものだ。今の時点での実力には大差がないが、競争による向上心を生む。無論だが、クラス長は一度決まるとどんな事があろうと一年

間は変わらないからそのつもりで」

つまりはクラス全体を見る役割をすると言う事か…。管理局の総帥をやってた頃に比べれば楽だが、周りが女生徒と言う事で面倒になる事は確定だなυ原作だと一夏が指名されていたがどうなるだろうな……

「ハイハーイ！黒逸君が良いと思いまーす♪」

「わたしは織斑君が良いでーす♪」

『（予測通り…か。しかし、推薦された者に拒否する権利は無い…とはな。）辞退する権利位は欲しい物だな…。』

「候補者は織斑一夏に黒逸戒翔か…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ。それと黒逸それは推薦した者に対して失礼な発言だ」

周りの女生徒の視線は彼等ならなんとかしてくれると言うなんとも他力本願な期待を込めた物である。

「さて、他にはいないのか？いないのなら2人のどちらかに投票あるいは実力差のある方を選ぶ事になるぞ？」

「待って下さい！納得が行きませんわ！」

織斑教諭のそんな言葉に机を叩き、悲鳴に近い声を上げる女生徒がいた。

『（あれは…確か昨日の…名前はセシリア・オルコットだったか？またややこしい事に成りそうだな…。）』

「その様な選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年間も味わえと言うのですか！」

セシリアの興奮は更にエスカレートし、とんでもない事を言い出す。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿共にされては困ります。わたくしはこんな島国にまで来てＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスなどをする気は毛頭ございませんわ！」

『（イギリスもそんなに変わらないと思うが……人の事を猿呼ばわりとは少し高町式のおはなしをした方が良いかもしれんな…？）』

俺の考えなどいざしらずセシリアは暴走機関車の如く更に加速していく。

「いいですか！？クラス代表は実力のトップがなるべきもの…つまりこのわたくしですわ！」

『また、詰まらない事を……』

俺がぼやいていると丁度教壇のある方を見ると織斑教諭が眉間に皺を寄せて米咬みの部分を軽く抑えているのが見えた。

『（織斑教諭も苦労人属性を持ってるんだなぅ）』

そんな事を考えていると

「大体、文化としても後進的なこの国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――」

『（流石に言い過ぎだな…。）其処までだ。それ以上は個人に対する侮辱にすらならないぞ？』

「事実のはずですわ。それよりも猿がこの高貴なるわたくしに抗議するなんて身の程を知りなさい！」

『国と国では文化の違いがあって当たり前だ。それに不満を言うのであれば来なくても良いだろう。しかし、それを踏まえて来ているのであれば不満を言うのは既に不満などではなくただの我が儘にしかならんぞ？』

「なんですって！いつこのわたくしが我が儘を言ったと言うのですか！」

『ふむ、自覚すらないとは…救いようがないな。それと勘違いしては困るがお前1人がトップの実力を持っている訳では無いんだぞ？探せば状況に応じてお前を超える奴は幾らでも出てくるぞ？』

「なっ！聞き捨てなりませんわ！このような侮辱をこのセシリア・オルコットこのような侮辱を受けたことはありませんわ！こうなったら…決闘ですわ！」

『良いだろう。貴様のその傲慢（プライド）を叩き潰してやろう。その後は俺と一夏のどちらかを代表にするか決める……それで良いですか織斑教諭？』

俺がそう言うと今まで俺とセシリアの口論とも言えないただ挑発するだけの事を静かに見守っていた織斑教諭が静かに口を開く。

「円滑に進めてくれるのは助かるが勝手にやられては教師であるわたし達の立華も考えてくれ。」

『すみません。なにぶん勢いに任せてしまったもので……』

「理解したならぱ良い。勝負は来週の月曜の放課後…黒逸にセシリアそして織斑は用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑教諭が教室の空気を切り替えるかの様に掌を打ち鳴らし、山田教諭に教壇を代わり自身はまたドアの近くに立つと教室全体を見回せる位置に陣取っていた。

『（取り敢えず他のＩＳの基本操作に特性を覚えるか…。）』

そして、時間は進み放課後へ……

「戒翔兄さん、大丈夫なのか？」

『なにがだ？』

「あのセシリアとの勝負です。アレでも専用機持ち…生半可な事では勝てませんよ？」

『その事か。』

「その事かって貴方は…『使用ＩＳ名ブルーティアーズイギリス製第三世代機でその名前の由来はそれに装備される第三世代試作兵機で遠隔操作される６基のＢＴ兵器が特徴だが操作している間は操者であるセシリアが他の行動をする事が出来なくなる欠点を持つ。主武装の説明もいるか？』……いや、いい。」

「黒逸君っていつの間にそんな事を調べてたの？」

「そ、そうです！この短い間にいつの間に調べたんだ！」

『いつの間にって……昨日のいざこざの後に専用機持ちの情報を集めただけだぞ？データはアルと８の中にバックアップを含めた物を入れてあるし情報を集める事は情報戦とも言い戦う前には基本な事だぞ？』

「確かにそうだけど弱点まで調べられる物なの？って言うかＩＳにデータを保存出来る物なの？」

『入試の時の戦闘映像があってそれを数回見れば直ぐに気付くと思うが…ＩＳにデータの管理や機体の調整と管理を任せる為に人工ＡＩの管制人格を組み込んであるんだ。』

「オリジナルだから出来る事なの？」

『そもそもＩＳの基本理論に俺の独自の理論を組み込んで作ったのがこの二機で拡張領域（バススロット）に後付け装備（イコライザ）を廃してデータ管理に複数の機体の調整と管理をさせている。』

「そうなんだ」

『コイツ等は独自に考え時には助言をくれたりするし時には口論になる事もあるな…。』

「凄い高性能なＩＳだね。」

『最高の相棒達だな…。』

「戒翔、少し良いか？」

『なんだ？』

「いいから来てくれ。」

『あぁ、わかった。すまんな』

そして、箒の後をついて歩いていくと校舎の屋上に出る。

『放課後でこんな場所になんの用が……』

「なんで今まで連絡をくれなかったんですか！」

『……』

「何故一言も言わずに……何故なんですか！！！」

『それは……』

戒翔がどう答えた物かと考えていると首に下げた剣十字を模したネックレスの待機状態のアルから警告音が鳴り響く

「な、なんだ？！」

《マスター！この場の空間に異常な歪曲場の発生を感知！何かが来ます！場所は……ＩＳ学園屋上の噴水付近！》

『なんだと！？箒、話は後だ早くこの場を離れろ！』

「え？」

戒翔の言葉と同時に屋上の中心…噴水が置かれた場所が急激に歪み何かの胎動の様な物が聞こえた。

「なんの音だ？」

『拙いな……こんな所で出現するとは』

「何が来ると言うのだ！」

『箒、其処から動くなよ？』

「え？」

《来ます！》

そして其処に現れたのは……

「此処が地上界か…なかなかどうして空気が魔界よりも空気が澄んでいるみたいだな…。」

黒い体躯に頭から二本の角を生やし背中から毒々しい翼を生やした異形の者…一般的に悪魔に分類される者であった。

『高位悪魔(ハイ・デーモン)…か。』

「おや？人間(ごみ)如きがわたし達の位(クラス)が解るのですか？」

『それだけの魔力に障気を故意に垂れ流してたら嫌でも解る』

「驚愕ですね～？君は其処にいる人間(ごみ)とは違うみたいですね～」

『……今、なんて言った？』

「おや解りませんか？其処にいるモノですよ？わたしの魔力に当てられて気絶しかけているゴミ『それ以上その汚い口を開くな！』おやおや、嫌われていますね～？」

『他の奴らに被害が及ぶ前に貴様には元の魔界に戻ってもらうぞ！』

「貴方は本当に興味深いですね。わたしは気に入ったモノを集めるのを趣味にしてますから貴方は殺さずにわたしのコレクションに加えてあげますよ。」

『出来るならやってみろ！』

「行きますよ！悪魔槍（デモニックランス）ッ！！！」

『氷楯（レフレクシオー）』

「貴方も魔道を使うのですか！」

『魔道は貴様だけが使える訳ではないと言う事だ』

「へぇ？じゃあこれならどう？闇の眷属達よ契約に従い我に仇なす敵を滅ぼす剣と成せ！」

『なっ！？馬鹿か！こんな所で大規模魔法なんて使用するか！？（拙い！）空間隔離固定術式……』

「遅いわよ！その剣、音となりて地獄の底より高らかに奏でよ！虚（ゼロ）無葬送歌（レクエム）」

『ちぃっ、間に合え！封時結界…同時に…絶対防御壁！』

その瞬間、屋上全体を薄黒い膜に覆われそれに続く様に大気を揺るがす様な爆発と衝撃が内部で起こった。

『クソが！こんな場所で大規模殲滅型魔術を普通に使うか？って箒は……脈はちゃんとある…呼吸も少し弱めだが気絶してるだけ…か。』

「成る程、貴方には驚かされてばかりね？今の一瞬で空間と空間を隔離する高等魔法、そして尚且つ後ろのゴミを護る為とは言え高度な全周囲型の防御壁を展開…。益々わたしは貴方を自分の物にした

いわね〜？」

『テメェみたいな野郎の物か？御免被るな。』

「あら失礼ね？こんな形(なり)をしているけど悪魔にも性別は存在します。
因みにわたしは性別で言えば女性よ？」

「単細胞生物ならいざ知らず人間(ホモサピエンス)やそれに近しい生態に雄と雌は存在するのよ？」

『テメェと生物雑学を語る気はさらさら無い。』

「つれないわねぇ？でもまたそんな所が可愛いわね？」

『寒気しか感じないぞ？さっさと貴様を魔界に還(かえ)してこの場の歪みを修復しないといけないのだからな…。』

「あの門(ゲート)を？」

『門(ゲート)…だと？』

「貴方は空間の歪みと言うみたいだけどアレを使うわたし達としては出入り口の様なもので総称でアレを門(ゲート)と呼称しているの。」

『我々って事はそれなりの数がこの世界に来ているって事だな？』

「そう考えてくれて良いと思うわよ？もっとも何かしらの力が働いているのか知能がある程度……というか人語を解せない輩は出られないみたいね？使い魔（アガシオン）を代わりに出した所門を潜る前に消滅しちゃったしね？」

『其処まで教えて良いのか？』

「戦う気は元々無いし、貴方は気に入ったしね？あっ、そうだ！こっちの姿が嫌いなら人間化した方がいいかしら？」

『……好きにしろ。俺はさっさと歪みの修正を「そんな物わたしが出た時に塞いじゃったわよ？」……は？』

「だってあのままだったら他の奴らが出て来たら色々と楽しみが減っちゃうでしょ？」

『貴様の考える事は解らんな…。』

「そう言えば自己紹介がまだよね？わたしの名前はゴモリー…宜しくね♪」

『ゴモリー……ソロモンの書の悪魔にして72柱の1体で確か愛を司り召喚者に愛し方を教える…だったか？』

「あら御存知？なら話は早いわね。どう？わたしと契約しない？勿論魂を取るなんて事は無いから安心して良いわよ？わたしは貴方が気に入ったから特別出血大サービスよ♪」

『考えている事が全く読めないな…。本当に何を考えているんだ？』

「そうねぇ？強いて言うならこっちの世界に７２柱の何人かが此方に来ているから様子見気分って所かしら？」

『……頭が痛くなってきたυ７２柱は存在しているだけで常人に与える影響は計り知れないと言うのに……』

「確か……ダンタリオンにガープでしょ？それとグラシャラボラスとラファエルにルシファーそして最後にサタンが来る予定になってるわよ？」

『どんなメンバーだよυそれだけいれば世界が滅ぶぞυ』

「殆どの悪魔や魔神の奴らは観光気分で来るかもね？」

『物騒な観光になりそうだな…』

「厄介なのはグラシャラボラスかしらね？アイツだけは血を狂気に近い感情で欲していたからね。」

『確か心を読み更にはそれを意のままに変える力……だったか？』

「そうよ。例えば愛し合っている人間の心を操り殺し合いをさせたりする事だってさせちゃう事も戸惑いもなくやるイカレた魔神ね…。」

『かなり厄介だな…。出会い頭で叩き潰すのが得策…か？いや……閉鎖空間を形成して……待てよ？それよりも……』

「ちょっと！こっちを無視して考え事をしないでくれるかしら？」

『……ん？あぁ、悪い…っていつの間に人間の姿になった？』

戒翔が思考の海に片足を突っ込んだ状態から戻るとゴモリーの姿は最初の悪魔の姿から抜群のプロポーションを持ったブロンド美女へと姿を変えていた。

「貴方が思考の海に飛び込む少し前よ？名前はゴモリーのままだとバレちゃうから……沙羅…如月沙羅（きさらぎさら）はどうかしら？」

『如月沙羅…か。良いんじゃないか？後はカモフラージュとして俺の家に居候してたと言う事で学園の教師にでもなるか？保険医として』

「貴方が毎日来てくれるなら良いわよ？」

『そんなに頻繁に怪我する訳ないだろ υ』

「つれないわねぇ？」

『勝手に言ってろ。戸籍云々はこっちでどうにかしておくから面接は自分でなんとかしろよ？』

「その位解ってるわ。それじゃ、またねぇ～♪」

そう言い残してゴモリーもとい如月沙羅は風景に溶け込むがごとくにして姿を消すのであった。

『さて……これが序章に過ぎないのかはたまたまだ序章にすらなっ

てないのか解らんが…これからソロモンの72柱の悪魔や魔神が出ると言うのか……サタンやルシファーにラファエルなら神魔界大戦時での面識があるから良いが問題は他の72柱のメンバー…か。問題解決の先が思いやられるな』

そして戒翔は気絶した箒を背負うと結界を解除してから屋上から去って行った。

## 第二話　敵の襲来？いや憑かれただけｕ（後書き）

御意見御感想をお待ちしております。

## 第三話　クラス代表決定戦

ーーーＩＳ学園第３アリーナ　ピットーーー

「準備は良いか？」

『良いも悪いも無い。何時でも最高な状態だ。』

「頑張ってね～♪ちーちゃんと箒ちゃんの三人で応援するからね～♪」

今俺は箒と千冬…此処では織斑教諭と篠ノ乃博士のその三人と一緒にアリーナ内のピットにいる。箒とのやりとりからあっという間に一週間と言う日は過ぎた。なんだ？その間の事？作者の技量不足と言う事にしておいてくれ。

「戒翔兄さん、大丈夫なのか？相手は仮にも代表候補生だぞ。」

『そんな事を気にしているのか？』

「そんな事！そんな事とはなんですか！人がせっかく心配していると言うのに！戒翔兄さんは……」

「箒、少し落ち着け。戒翔、アレは使うなよ？」

『言われなくともクラス代表決定ぐらいで出す代物でもないさ。試験の時は千冬が相手だから出したんだからな？アレは単体で戦争を起こす事が可能だからな…そう易々と出して良い物ではない事ぐら

い解っている…それに今回はアルカインで行く……向こうは第3世代で来るが此方はあのシステムと単一仕様能力のお蔭とアルがいる為に第7か第8世代に相当するからな』

「戒翔さんの才能も含まれないんですか？」

「……あまりやり過ぎるなよ？」

「かーくんは偶にやりすぎるからね～♪」

『言われなくとも俺の全力の１０％で行くから心配するな。と言うかそんなに信用ないのか？』

「当たり前ですよ？戒翔さんはこの6年もの間連絡もなく音信不通で行方知れずだったんですから姉さんや織斑先生がどれだけ心配したと思ってるんですか。」

《その通りですね。悪いのはマスターですよ？》

俺の言葉に3人はダメ出しをする。確かに白騎士事件の時に世界の修正力に負けて6年の時を飛んでしまったのを言えないからしょうがないが千冬と束には今度説明をさせられるだろうなｕ

「かーくん、それってかーくんのＩＳ？束さんはかーくんがＩＳを持ってるのを知らないよ？」

《初めまして。わたしはマスターのＩＳの管理をしています。正式名称をアルカイン…愛称はアルと言います以後お見知り置きを》

『あの時は仮初めの似非ＩＳを使っていただけで専用機は幾つか持っているぞ？中学の時に見せて貰った理論に俺なりの技術理論を組

み込んで作製しそれ等の管理をしてくれるのが今この指輪型のアルとネックレス型の８で二人で別々のタイプの専用機を管理して貰っている』

「束さんびっくり～！かーくんって身体能力でちーちゃん以上なのにあの理論を少し見せただけ自作の専用機を造っちゃうなんて…しかも人工ＡＩに言語機能に学習機能もあるなんて凄いね～！」

「幼なじみとしては戒翔が規格外な事は今に始まった事では無いが……」

「戒翔さんですから」

《マスターですしね》

『人を人外みたいに言うなよなぅ』

「相手を待たせているし話はまた後にしておくか。……まだ話し足りないが」

『そうだな……行くぞ！アルカイン…セット！』

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！》

その瞬間、戒翔の身体を眩い光が包み込んだ。そして、光が収まると其処には黒い全身装甲型（フルスキンタイプ）のＩＳ……アルカインが佇んでいた。それは渡り歩いた世界の１つに存在する兵器…ＡＳ（アームスレイブ）の１つでとあるシステムを積んだ特殊な機体、名称をアーバレストその機体の原典…兄弟機とも言うべきその機体は白銀ではなく全てを呑み込むかのような漆黒の色をしていた。

『じゃあ、行ってくる。』

「勝って下さい。」

「ちーちゃんと箒ちゃんに束さんが応援してるからね～♪」

「戒翔、油断するなよ」

『俺がする訳ないだろ？アル、タスラムとカオスにフィアーの事前呼び出しの準備を頼む。覇槍…ランス・オブ・ラグナロク！』

戒翔が喋ったその瞬間、右手に2メートルを超える突撃槍が量子展開される。

『行くぞ！』

そしてピットにあるカタパルトから戒翔は飛び立ち、セシリアと対峙する。

「良く逃げずに来ましたわね。その事については褒めてさしあげますわ。」

『そんな事で一々誉める事ては無いだろう。さっさと始めるぞセシリア・オルコット』

「このわたくしの降参と言う慈悲が解らないなんて！……良いですわ全力で倒して差し上げますわ！」

『はっ！倒してみろ……行くぞ！』

戒翔はそう言うと背中に機体の１．５倍はある翼…イカロスを量子変換し展開しながらセシリアへと接近する。

「そう簡単に接近を許すほどわたくしは甘くはありませんわよ！」

セシリアはそう言いながら青を基調とした専用ＩＳ、ブルーティアーズのリアスカートから４基の遠隔操作兵器ブルーティアーズを射出する。そしてこの装備こそＩＳの名前の由来そのものでもある。

『ＢＴ兵器か……だが…狙いが甘い！！！』

「なっ！」

戒翔は後ろに目があるかの様に確認もせずにビームを避けその後も立て続けに襲い来るビームを悉く避けなおもセシリアに接近する。

『そこぉッ！』

「きゃあッ！？」

戒翔の振るった覇槍をセシリアは防ぐもその威力に悲鳴を上げながら吹き飛ばされる。

「この！調子に乗って！」

レーザーライフル、スターライトＭｋ－？をセシリアは正確に戒翔の駆るアルカインに照準を合わせるがその全てをかわされていた。

『狙いが粗くなってるぞ！』

「逃げ回ってばかりの人が言ってくれますわね！」

『ならば今度は此方からだ！アル、Λドライバ！』

その瞬間、目に見えない何かがアルカインを包む。

「虚仮（こけ）脅しなんて足掻くなんて見苦しいだけですわ！」

そして、セシリアがスターライトを構え、戒翔目掛けて撃つ。直撃コースの筈の物を戒翔は避けようともしなかった。

「なっ！？」

そして、次の瞬間、セシリアの放ったレーザーは自ら戒翔を避けるかの様に逸れた。それを見たセシリアは驚愕の声を観戦しているクラス全員を代表したかの如く上げる。

「なっなんですのそれは！？」

『教えると思うか？』

「くっ！」

『さっきので無駄と解らなかったのか？それに動作が遅い』

「なっ！？（何時の間に！？）」

セシリアはスターライトを構え戒翔に向けるがその前に既に戒翔はセシリアの懐に何時の間にか移動していた。

『チェック…メイト！！！』

戒翔は拳をセシリアに合わせる瞬間、爆発が起きた。

《勝者黒逸戒翔》

アリーナに設置されたスピーカーから聞こえる声に戒翔は構えを解き爆発の影響で気絶し落ちてくるセシリアを素早く地面に回り込みお姫様抱っこで抱きかかえてピットに戻る。

『いま戻……三人共…何故睨むんだ？しかも山田教諭まで』

「「「「それは自分の胸に聞け（いて）（いて下さい）！！！」」」」

『意味が解らんυ次の相手は……千冬の弟だったな。準備は出来ているのか？』

「勿論だよ～♪いっくんの白式の調整は束さんに掛かればちょちょいのちょいだもんね～ブイブイ♪」

戒翔の質問に何故か説明しながら踊って説明をする束

『流石としか言えないな…。』

「かーくんのタイピングの速度に流石の束さんも負けるけどね～」

『俺は異常だからな。』

「次は一夏との模擬戦闘だな。」

『楽しみに見ていろ…と言うか姉としては弟の心配はしないのか？』

「相手が戒翔では仕方ないだろ」

『それで納得してしまうのはどうかと思うぞ？』

「戒翔さんだから仕方ないですよ。」

『ハァ、覇槍を解除。続いてフレイムを換装固定し龍騎兵（ドラグーン）と龍牙兵（ファング）を換装』

戒翔の言葉に連動し、アルカインの持っていた長槍が量子変換されて消え、新たに量子変換され展開された武装は両腰に刀が二本とその下のリアスカートに八基の牙を模した兵器に背中には大天使の様な十二枚の翼が現れる

「おぉ～♪また新しい武器だ♪」

『こいつはセシリアのブルーティアーズと似てはいるが此方の方が性能は上だ。』

『根本的な所は違うが設計上ブルーティアーズに似てはいる……が此方と彼方の違いと言うのは操縦者が意識を集中しなければいけな

いが此方の武装はその欠点を量子インターフェースを用いて操縦者の脳波に反応して行動する。それにより意識をそちらに向ける必要性もなく戦闘行為に支障を出す事もない。』

「量子インターフェースか～♪束さんも考え付かなかったね～。流石かーくん♪」

『それじゃ、行ってくる。』

「行ってこい！」

『黒逸戒翔！アルカイン出撃る！』

そして、カタパルトから飛び出してその勢いのまま飛翔する。

「戒翔さん待ってましたよ。」

『待たせたな…一夏。さぁ、始めよう』

そして一夏が乗る白式と戒翔の乗るアルカイン……白と黒が激突した。

## 第三話　クラス代表決定戦（後書き）

御感想と御意見をお待ちしております。

## 第四話　一夏ＶＳ戒翔

ＩＳ学園のアリーナでは織斑一夏の白と黒逸戒翔の黒が何度も交錯する。

『ふむ…なかなかどうして、持ちこたえる物だな…。』

「当たり前だ、この日の為に…そして誰かを護る為に鍛えてきたんだからな！」

『……そうか…だが、そう簡単には行かないぞ？それに一次移行（ファーストシフト）が完了するまでコレが持ち堪えられるか…な！』

戒翔はそう言うと瞬時加速（イグニッションブースト）で距離を一気に空けると背中から１２基ものＢＴ兵器を射出する。

「げっ！」

『行くぞ、一夏！』

「くっ！（やっぱり戒翔さんは凄いな…俺はまだあの人の足下にすら届いていない事が解ったけど、このまま黙ってやられない！一矢報いる為にも）負けられないんだぁッ！！」

一夏は戒翔の瞬時加速を見様見真似で使い距離を詰め、長刀を振るう。

『っと…真似だけで簡単に行くとは…な。』

戒翔はそう言いながらボルケーノとインフェルノで一夏が振るう長刀を弾くとＢＴ兵器…ドラグーンで一夏に攻撃をする。一夏は不規則かつ縦横無尽に動き回るソレに翻弄されていた。

「なっ、このっ！セシリアのとは違いすぎるだろ、コレッ！」

『なんだ、コレだけでギブアップか？』

「んな事するかよッ！！」

『なら、コレを耐えて見せろ、一夏ぁッ！！！』

戒翔はそう言って一夏の周りを飛ぶドラグーンで攻撃を開始する。

「くっ、このぉッ！」

そんな一夏は多方向から迫り来るビームをギリギリで躱すが、それでもシールドエネルギーが徐々に削られていく。

『良く躱すがそろそろ残量心許ないだろ？』

「ま、まだまだ！」

『コレで終いだッ！！』

戒翔が叫び、ドラグーンによる一斉射撃を始めようとしたその瞬間（とき）

一夏と白式が光に包まれた。

『……始まったか』

「コレが…白式」

『一次移行が済んだ様だな…これで白式は正式にお前の専用機となった訳だ一夏』

光が収まり、一夏が白式の形が変わった事に驚いていると攻撃の手を止めて静観していた戒翔が一夏に話しかけた。

白式の形は最初の無骨な感じからより洗練され、滑らかな曲線によりスリムに、そしてシャープな形となりどこか中世の騎士を思わせる形となっていた。そして変わったのは姿だけではなかった

「雪片…弐型？（千冬姉の使っていた武器と同じ名前？）」

手に持った長刀も姿を変えていたのである。その形は日本刀の様なそれは反りに加えて長さもあり太刀と言った方がしっくりとくる物となり、鎬の部分からは呼応するかのようにして僅かな光が漏れでていた。妙に機械的な造りがそれをＩＳ用に造られていた事を示していた。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

『ふっ、そうか』

「俺は…俺の家族を護る！もう、護られるのは終わりにする。」

『なら、どうする？』

戒翔の言葉に一夏は静かに目を閉じ、次に開けた時、目には強い覚悟を秘めた目をしていた。

「まずは、千冬姉の名前を守る！」

一夏は雪片弐型の刃の部分をスライドさせると光刃が現われる

『フフッ、でないと千冬に笑われるからな？』

「行くぞ！」

『来い！！』

そう言って一夏は雪片弐型を中段に構えて突撃し、戒翔はそんな一夏をインフェルノとボルケーノで迎えうつ。

《試合終了！勝者黒逸戒翔》

「へ？」

『む？』

しかし、それは意外にも試合終了のブザーによりアッサリと勝負は決まった。それに対して一夏はマヌケな声で、戒翔は不粋な邪魔をされた事に対して対照的とは違うが２人は声を上げるのであった。

ーーーＩＳ専用ピット内ーーー

「よくもまぁ、持ち上げてくれたものだな？それでこの結果がコレか、大馬鹿者」

ピットに戻り合流した後に待っていたのは腕組みをして此方を見る織斑千冬であった。そしてその第一声がキツい物であった

「武器の特性を考えずに使うからこうなるのだ。身を持って理解しただろう。明日からは訓練に励む事だな、暇があればＩＳを起動しろ。いいな？」

「……はい」

一夏はただ、そんな千冬にそう返すしかなかった。ああ言った手前でこれである為に格好がつかずバツの悪い顔をしていた。

その後は山田教諭による簡単な説明とＩＳに関わる事で触れる規則が書かれた説明書の様な物を手渡される。勿論だがこれもまた広辞苑並に分厚いのであった。

『一夏も大変だな…』

「そう言うかーくんもこれからが大変だよ？」

『何故だ？』

静観していた戒翔はボソリと呟くがそれを聞いていた束が意味深な事を告げると戒翔はさも意味が解らないという風な顔をしながら束に聞く。

「だって、ちーちゃんと同じＩＳ適性Ｓランクでちーちゃんは嫌うけど戦乙女（ヴリュンヒルデ）と同等かそれ以上とされる皇帝（カイザー）が忽然と行方を眩ましてたのに再び現れたんだからね？」

『俺の注目度は世界規模かよｕ』

束の衝撃的な言葉により戒翔はげんなりとするが世界に移動した直後の事と周りの人間の発言からある程度の事は予測はしていた筈である。

「仕方ないよ？かーくんはちーちゃんとは違って自作のＩＳで正体を隠さずに一万発ものミサイルを２人だけで消し飛ばしたからね？因みにちーちゃんが二千発でかーくんが八千発ね？」

『めんどクセェｕ』

「それはしょうがないよ、かーくんのスペックは規格外だしＩＳも似たような物だからね？」

「確かに規格外ではあるが、それが国に対しての抑止力にもなっているから馬鹿には出来ないがな…。」

『織斑教諭も何気に酷い事を言いますね？』

「そうか？戒翔にはそれで十分だと思うぞ？」

『俺を何だと思っているんだよｕ』

「規格外？」

「大魔神？」

「バグキャラ？」

「人外かな～？」

上から一夏、箒、千冬、束とそれぞれが言う。

『取り敢えず……』

「ワキャーー！？いたい、いたい！か、かーくん！天才な束さんの頭が真っ赤なトマト的な事になっちゃうよ！？」

戒翔は徐に手を束の頭を鷲掴みにして万力の様に力を入れる。それに対して束は悲鳴を上げ、戒翔に抗議した。

『いっそそのまま潰れろ』

「に〝ゃぁぁーーー！？」

戒翔はそう言った瞬間、束の絶叫と共に嫌な音がピット内に響くのであった。

## 第四話　一夏ＶＳ戒翔（後書き）

御意見と御感想にアドバイスなどがありましたらお願いしますｏ（、▽、）ｏ

## 第五話　転校生は家族！？と中国人？

「ではこれよりＩＳによる基本的な飛行操作を行ってもらう。織斑、オルコットに黒逸。試しに飛んでみろ」

四月も下旬に入り入学当時の満開の桜は散り、若い芽が生える頃。俺達はグラウンドにてＩＳの基本動作の訓練を鬼教官こと織斑教諭に教えて貰っていた

『行くぞ、アル！イカロスの装備だ』

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｓｔａｎｄｂｙ　ｌａｄｙ》

戒翔はいち早く自身の機体アルカインを展開する。ＩＳは基本的にフッティングを完了すると待機状態は使用者のアクセサリーとなる。名前を呼ばれた織斑はガントレット、オルコットは青のイヤーカフス。戒翔は人差し指にはまった指輪である

戒翔は叫び腕を突き出すと自身を光が包む。そして、その光が再集結し、機体として構成される。その間僅か０．５秒

「早いな」

「俺だって！」

織斑が右腕に装着した白式を左手を添えて集中する為にを瞑る。次の瞬間には白式を纏い僅かに浮いていた

「よし、飛べ」

織斑教諭の言葉に戒翔は瞬時にイメージをし、瞬時加速で急上昇し適当な場所で静止する。

「いきなり瞬時加速（イグニッションブースト）をする奴がいるか！まだ解らない者に見せても仕方ないだろうが」

『済まない、飛ばし過ぎ……一夏はどうした？』

戒翔の言葉に織斑教諭が一夏を見れば未だ飛ばずにグラウンドで立ち往生している

「……何をしている。スペック上の出力ではアルカインには劣るものの他のＩＳには負けんのだぞ」

「そうは言っても……」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすいように模索する方が建設的でしてよ」

「うーん」

『セシリア、もっと分かり易く。一夏、自分の中にある物でイメージし易い物を思い浮かべろ。どんな事でもいい。俺なら空を翔るイメージだ。自分が鳥になった様なイメージでも良いし飛行機のイメージも良いかもしれん』

戒翔の言葉でなんとなく理解したのか漸くセシリアの隣を飛行する事が出来た

『（一夏は危なげに操作しているがセシリアは代表候補なだけあって安定しているな）そろそろ下降するか？』

「織斑、オルコット、黒逸、急下降と完全停止をやってみせろ。目標は十センチだ」

「了解です。それでは戒翔さん、お先に」

セシリアはそう言うと一気に下降していく。

「上手いもんだなぁ」

『次は俺だな……織斑教諭、大技は可能か？』

「注意してもやるつもりなのだろ？」

『まぁ、な。さて……行くぞ！』

戒翔は急上昇した時と同様に瞬時加速を使用し、更に捻りを入れて急下降をする。その速度は音速の域であった

「戒翔さん！？」

速度を緩めずにあわや地表に激突すると感じたセシリアだったがそれは杞憂に終わった。

「……危険な行為はするな。此方の寿命が縮むぞ」

『ふざけた積もりはない。機体の性能でどこまで行けるか試しただけだ』

地上との距離を僅か一センチだけ残して緊急停止する戒翔に呆れながらも織斑教諭が注意をするが悪びれた様子なく戒翔は告げた。

『次は一夏だ。……って！？』

戒翔は次の瞬間、瞬時加速で一夏の落下地点に移動すると片腕を翳してＡＩＣ（アクオオギヤヤルラー）を作動させて激突するのを未然に防ぐ

『ったく、止まる事を考えて下降しろよな？』

「た、助かったよ」

「黒逸が咄嗟に動かなかったらグラウンドに大穴が開いていたな」

「一夏！大丈夫か！？」

『篠ノ乃、俺が受け止めたから問題はないぞ』

「戒翔さん、それはもしかして」

『ＡＩＣ……ＰＩＣ（パッシヴキヤヤルラー）の発展型で効果は慣性の停止……つまり質量を持つ物に対して完全に動きを止める事が可能で現段階では反則的な武装だな。実装されているのはドイツの第三世代と俺のＩＳ位だ』

「それで一夏を受け止めたのか、流石は戒翔さん」

『いや、あのまま激突されたらグラウンドの片付けが大変だなーと』

「もしかして、俺ってそれだけの事で助けられたのか！？」

『だって片付けが面倒だし？』

戒翔の言葉に一夏はＩＳを纏った状態でｏｒｚになっていた。かなりおかしな状態である

そんな事をお構い無しに授業は進んで行く。

「次は黒逸だ」

先程のやりとりの後、セシリアと一夏がなにやらプライベートチャンネルで会話をしている中で織斑教諭が戒翔に武器の展開（オープン）を要求する。

『……これで良いか？』

織斑教諭の言葉に従って戒翔は右手に長大な突撃槍が握られていた

「やはり早いな、展開する秒数は０．１といった所か」

『ヴェルフェゴールは何時まで隠すんだ？そろそろ良いかと思うのだが』

「……黒逸のいる事がバレている事だし、今でも良いが？」

『了解、アルカイン収納（クローズ）』

織斑教諭の言葉に戒翔はアルカインを待機状態に戻した

「織斑先生、ヴェルフェゴールとは？」

「なに、見れば解る。全盛期の私ですら歯が立たなかったＩＳだ」

その言葉に山田教諭と生徒は驚愕の表情で戒翔を見る

『８、ヴェルフェゴールを展開』

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

電子音声が聞こえた瞬間、戒翔の体から光が溢れ、収束するとアルカインの白銀の色とは違い深紅の全身装甲に背中には１２枚の翼、妙に盛り上がった両肩には巨大な楯、後ろ腰には真横に日本刀の様な物がマウントされ、太腿には細身の銃が二丁マウントしていた。その姿形に生徒達は感嘆の声を上げるがその目が行くのは頭部で鬼を模した様な仮面で畏怖させるのには十分であった。

「……その仮面はなんとかならんのか？生徒達が怯えるだろ」

『む？その様だな……８、頭部モジュールの仕様変更。仮面を廃しで顔を露出』

その言葉に仮面部分だけが消え去り現れたのは額にＶ字アンテナを備え、オレンジに光るツインアイ。口元は窪み四角の赤い突起が特徴でこの世界には無い標準型ガンダムタイプの物であった

「其方の方がマシだな。よし、その状態で先程の様にやれ」

『了解』

織斑教諭の言葉に戒翔はアルカインで行った事を再び行う

「時間だな、授業はこれで終わりだ。解散！」

～一夏ｓｉｄｅ～

「戒翔、今日は助かったよ」

『そう言うのならば機体制御はしっかりとしろ』

「それなんだけどさ…」

『…なんだ？』

戒翔が訝しげに俺を見る。やっぱり止そうかな……

『ハァ……訓練くらい付き合ってやる』

「ホントか！？」

『上達しなければ守りたい物も守れんだろ』

「でも、俺の言いたい事がよく解ったよな」

まだ何も言ってないんだけどマジで

『大体なら目で解る。目の色で解る事はかなりある焦燥や怒りに恋慕だったり、思い詰めた事などとな』

「それは戒翔が規格外だから出来る芸当な気がするな」

心底思うけど戒翔は千冬姉以上の腕に知識も博識で技術もある……どこの完璧超人なんだと突っ込みたい

『取り敢えず、着替えて寮に戻るぞ』

「待ってくれよ！」

戒翔がサッサと着替えて出て行き、俺は急いで着替えて更衣室を出る。取り敢えず、これからの訓練は箒の擬音混じりの訓練よりかはマシになる事に安堵していた

～一夏ｓｉｄｅｏｕｔ～

――――――――――――――――――――

「というわけで織斑一夏君と黒逸戒翔君のクラス代表就任を祝ってかんぱーい♪」

「「かんぱーい♪」」

『祝辞は有り難く受ける』

「戒翔、物凄いドライしゃないか？」

『アレでは仕方ないと思うが？』

「……見ない様にしてたんだけど」

あの後、夕食を済ませた後の自由時間に1組が集まりそれは始まった。各自飲み物を持ちやいのやいのと騒ぐ中で戒翔と一夏は後ろに張られたあるモノを見る

～織斑一夏、黒逸戒翔クラス代表就任パーティー～

何故、一夏と俺の2人がクラス代表なのかは一夏がＩＳ初心者な為な事と俺がＩＳの経験者な為に学園側と織斑教諭が取った処置で経験のある俺が一夏にＩＳを教える為に同じく代表という形になったのである

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねー」

「うんうん」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとだよねー」

そう言うのは確か二組の生徒だったか？一組だけの集まりの筈だが確実にクラスの人数以上にいるだろこれ！？何故、クラスの集まりで人数を超える！？

「一夏、戒翔人気者だな」

「……本当にそう思うのか？」

「ふん」

箒は不機嫌ですと言わんばかりにお茶を飲む。一夏に原因があるのか、はたまた俺か解らないがどうしたものか……

戒翔がそんな事を考えていると一人の女生徒が周りを割って入ってくる。

「はいはーい、新聞部でーす。噂の新入生、織斑一夏君と黒逸戒翔様に特別インタビューをしに来ましたー♪」

その言葉に周りの子達はオーと盛り上がる。此方としてはテンションが上がりっ放しの彼女達に引き気味なのだが……というか何故、俺だけが敬称が様なんだ？おかしいだろ！

「あ、私は黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってまーす。はい、これ名刺ね」

そう言って渡してくる名刺を一夏と俺は取り敢えず受け取る。画数が多い名前だな…。

『それで、特別インタビューとは？だいたい出向いて来たのだから色々と聞きたくて来たのだろ？』

「は、はい！取り敢えず、一夏君を取材して戒翔様の取材をと……それではズバリ聞きます！」

黛はそう言うと片手に持つボイスレコーダーをずずいっと突き出し、子供の様に期待の籠もったキラキラした目で一夏を見る。隣で見てはいるが一夏がやや引き気味だな

「えーと……まぁ、なんというか、頑張ります」

そう言うと期待に添えなかったのか残念そうな顔をする黛

「えー。もっと良いコメントちょうだいよ～。例えばさ、俺に触れると火傷するぜ！みたいな？」

「なんだそれ、前時代の台詞だろ！？」

『兎に角早く済ませろ』

「そーそー、改めてコメントをどうぞ」

「自分、不器用ですから」

「それこそ前時代の台詞だよー。……しょうがない、適当に捏造するか」

「本人の前でそれを言う！？」

確かにそれは問題だが、マトモなコメントをしないお前も悪いと思うぞ？

「それでわ、戒翔様。コメントをお願いします／／／／／」

何故、赤らむ？それにインパクトのあるモノ……か

『お前の心（ハート）を狙い撃つ！』

「はぅ！？」

黛と周りの女生徒が顔を赤らめて騒いでいた。狙ってやったはいいがどうするか……よし

『一夏、後は任せた』

「は！？この状態にして俺に丸投げか！？」

一夏の言葉なぞ聞いてたら逃げ遅れるからな…騒ぎの中から自身の飲み物だけ確保すると壁を背にして眺める事にすると、隣に織斑教諭が来る

「もう、良いのか？」

『騒がしいのは苦手だからな。それに若い奴の空気は対応に困る』

「お前が言うのか？」

『ジュースよりアルコールが良いな』

「戒翔はまだ未成年だろ」

『気分的なもんだ。それに……』

「それに？」

『久しぶりに3人で昔話に華を咲かせるか？』

「それも良いな…」

懐かしむ様に微笑む千冬に戒翔は手に持ったコーヒーを飲む

暫くして

「戒翔さん、此方にいらしたのですか？」

『セシリア、どうかしたか？』

「いえ、黛さんが専用機持ちの集合写真を撮ると言いましたので」

『写真は苦手なんだがな』

「つべこべ言わずに行ってこい。私も行く」

『ったく、しょうがないなぁ』

そう言って戒翔はセシリアに連れられてクラスの皆の所に戻る。それに千冬は後ろから歩いていく

「はいはーい、戒翔様も来た事ですので専用機持ちの方達で写真を撮りまーす。」

『どの様に撮るんだ？』

「3人で握手した写真かなー？あ、その前にセシリアちゃんと戒翔

様のツーショットかなー？」

「え？／／／／／／」

『どうしてだ？3人纏めた方が早いだろ？』

「それはセシリアちゃんが「な、なんでも無いですわ！？／／／／／／／／／」まぁ、そう言う事にしとくねー」

『なんなんだ？』

「この朴念仁が」

『？まぁ、良いか……セシリア、撮るならサッサとするぞ』

「は、はい！／／／／／／／／」

そして、ツーショットを撮るべく集まり、シャッターが押された次の瞬間

「あ、あなたねぇ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

『なんなんだ？』

「か、かーくん！束さんの頭が割れそうなんだよ！？」

写真を撮る瞬間、クラス全員が集まっていた。セシリア、俺、箒に俺の後ろに千冬でセシリアの隣にはこれまた偶然か一夏でセシリアと俺の間にはいつの間にいたのか束が俺に抱きついた写真になっていた。

束には唐突に現れ、抱きついた為にアイアンクローを掛けていたのは悪くない筈だ。それからクラス？でのドンチャン騒ぎは十時を過ぎるまで続いた。女性というのはどこにいっても体力があるな

――――――――――――――――――――

『ドッと疲れたな』

「随分と楽しそうだったが？」

『どこがだ。騒がしすぎて叶わんよ。箒は楽しいか？』

俺が疲れてベッドに沈んでいると棘のある言葉を箒が言う。それに対して俺は自身は楽しめたのか聞く

「……楽しめただろうな」

『そうか。じゃあ、俺はもう寝る』

頑固なのも問題だな。たまには素直になれないものか、ずっと無言

でお茶ばかり飲んでいただけだろうに

「な、なに？まだ十時半ではないか！？」

『疲れすぎたからな…。やはり、あの女性特有なのか？あのハイテンションには付いてはいけないな…。俺はあっち向いてるからサッサと着替えろ』

「わ、解っている！」

そう言って、箒に背を向けて戒翔は目を瞑り、着替える際の衣擦れの音には反応せずにＩＳに精神接続し、これまでの情報整理をする。そして、箒の言葉が掛かるまで続く。

「い、いいぞ」

箒の言葉に俺は体の向きを直すと浴衣姿の箒……帯を変えたのか？

『帯を変えたのか？』

「え？」

『昨日は白の帯だったが今日は紺色の帯か』

「よ、よく見ているな」

『そりゃ、部屋も同じだし寝間着も見ているし、箒を見ているからな。』

「そ、そうか。私を見ているからか」

急に機嫌が良くなる箒に戒翔は疑問に思った。一夏が好きなのではと考えるが昔に何があったかは知らないので解る筈もない。

「よし、眠るとしよう！」

『そ、そうだな…。』

そのテンションで寝れるのか甚だ疑わしいが、箒が寝ると言うのだから良いか

〜〜翌日〜〜

「黒逸君、おはよー」

『おはよう。』

「ねぇ、転校生の噂って聞いた？」

『転校生？何故この様な時期に？確か、入学では無く転入ならばかなり厳しい筈……まさか』

「そう、どうやら中国の代表候補生らしいよ」

『そうなのか』

「あら、今頃になって私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

セシリアは戒翔の隣で腰に手を当ててそんな事を言う。イギリス人

故なのか、とてもその格好は様になっている

「このクラスに転入してくる訳ではないのだろ？そんなに騒ぐ事でもあるまい」

箒が何時の間にか窓際の席から戒翔達の席の側にいた。彼女も女子という事か

「戒翔はどんな奴か気にならないか？」

『……興味無いな』

「そうも言ってられないよ？転校生は2人でその内の1人は黒逸君と同じ名字だったよ？」

『……なに？どういう事だ』

「それが…ロシア人みたいなんだけど代表候補生って訳でも無いみたいなんだよねー、しかも姉妹で来るみたいだよ？」

『ロシア人の姉妹？』

スカリエッティの仕業だな…。しかし、ロシア人の姉妹……紅の姉妹か？それ位しか思いつかんな

「む……気になるのか？」

『同じ名字って事に引っ掛かるだけだ。もしかしたら……』

「全員、席に着け！ＳＨＲを始めるぞ」

織斑教諭と山田教諭が同時に入ってくる。

「さて、先ずは知っている奴もいる様だがこのクラスに転校生を紹介する。入れ」

『なっ！？』

「戒翔、どうした？」

戒翔が驚愕するのは無理もない。教室に入って来た2人の女性徒は銀髪のロシア人でやや小さめの体に長髪で幼さの残る顔立ちの女性徒、もう片方は短めの銀髪で鋭い目をした女性徒。そう

『イーニァに……クリスカだと……』

「さて、自己紹介をして貰おうか」

戒翔の呟きに千冬は一瞬だけ訝しげにしたがすぐに教師として転校生に指示をする。

「イーニァ・S・クロイツです」

「……クリスカ・B・クロイツだ」

『……嘘だろ』

「2人はロシア人だが、国籍は日本になり、黒逸とは家族となっている。黒逸、後で2人に学園の案内をしてやれ。クラス委員長も兼

任なのだからな。後、連絡事項は無いな、ＳＨＲは終了だ。」
千冬の言葉にクラス全員の目が一斉に戒翔に向けられる。勿論、一夏を始めとしてセシリアや珍しく箒も此方を見ていた
「かいと、久しぶりだね」
『そうだな……3年振りか？』
「元気そうで良かったわ。私もイーニァも寂しかったのよ？」
『それは済まなかったな、此方も色々とゴタゴタしていたからな』
「えへへ、かいとー♪」
『おっと、イーニァは甘えん坊だな？』
「かいとだけだよ？」
『スカリエッティの奴はなんか言ってたか？』
「私達にＩＳを渡す位で他にはなにも言ってないわね」
「戒翔さん、其方の方々は御家族の方ですの？」
3人の会話に何処か入り込めない様子で一夏達は見ていたが我慢の限界だったのかセシリアが入ってくる
『あぁ、織斑教諭の紹介の通りだ。些か家庭の事情とやらで離れて

はいたがな？所で２人はＩＳを持っていると聞いたが、あの馬鹿は何を持たせたんだ？』

「イーニァにはセラヴィーで私にはデスティニーを渡してきたわね」

『どちらも“ガンダム”タイプか……』

「ガンダムタイプ？なんだそれ？」

『俺の搭乗ＩＳやイーニァやクリスカのＩＳの総称でシステムの略称から取った物だ。詳細はＧｅｎｅｒａｌ Ｕｎｉｌａｔｅｒａｌ Ｎｅｕｒｏ－Ｌｉｎｋ Ｄｉｓｐｅｒｓｉｖｅ Ａｕｔｏｎｏｍｉｃ Ｍａｎｅｕｖｅｒ Ｓｙｎｔｈｅｓｉｓ Ｓｙｓｔｅｍで単方向の分散型神経接続によって自律機動をおこなう汎用統合性システムのＯＳだ。省略化してＧ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍでガンダムと言う』

「なにそれ！？たったそれだけで姿勢制御なんかが出来ちゃうの！？」

『それだけと言うがそのＯＳの設定を細かくする事であらゆる局面に対応する事が出来る。それと俺の搭乗ＩＳだがリミッターを設けられる事になったぞ？』

「リミッター！？なんで！」

説明の中で戒翔がヴェルフェゴールに制約をされる事になったと告げると一夏が驚愕をする

『コイツの武装や出力は慨存するどのＩＳとも違い過ぎるってのもあるが、制約の内容はエンジン出力を１００％から５０％に抑え、ビーム兵装の出力を制限し、ヴォワチュール・リュミエール推進システム所謂光パルスで進む高推力スラスターだがコイツはエネルギー切れが起きない限り推進切れを起こさない物でな、他にも多数のｓｙｓｔｅｍや武装がある。そして、それらにも制限がついて装甲の強度の弱体化、それに先程言ったＶＬｓｙｓｔｅｍを使用するスラスターの出力を半減にマルチロックｓｙｓｔｅｍも使用不可だ。救いなのはダブルロックは使えるって事位だな』

「物凄い制限のオンパレードだな」

『妥当だろう。俺の機体はハッキリ言って化物だからな』

「あの機体が戦闘する場面は見た事がありませんわ。何故、其処まで」

「それでも戒翔は負けないわ。」

「かいとがいちばんだもん！」

クリスカとイーニァの言葉にクラスの面々は声援を送ってくる

「専用機持ちは今の所は、１組と４組だけだから余裕だよー」

「織斑君と黒逸君がいるんだから楽勝だねー♪」

「――その情報、古いわよ」

『だれだ？』

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ、私は2組の代表の鳳鈴音（ファザンイン）よ。今日はその宣戦布告に来たってわけ」

そう言った鳳鈴音は両腰に手を置くとトレードマークであるツインテールが揺れる

「何格好つけてんだ？すげぇ似合わねえぞ」

「んな……！？なんて事言うのよアンタは！」

『おい、鳳とやら後ろだ』

「なによ！」

一夏と言い争いをしていた鳳に戒翔は注意をし、鳳は強い口調で振り向き、頭を強襲した出席簿による軽快な音が響いた。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「は、はい……」

千冬を前にした鳳は目に見えて先程は打って変わり畏縮していた。

千冬の鋭い眼光にさらに怯んだ様子であった。

「また後で来るからね！逃げないでよね、一夏に戒翔！」

「さっさと戻れ」

「は、はい！」

また俺か？訳が解らないが考えても仕方ないか……。鳳は千冬の言葉に急いで２組に戻って行った

「……て言うかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知ったな」

そんな事を言うもんだから周りの視線が自然と一夏の所に注がれる

「……一夏、今のは誰だ？偉く親しそうではないか。しかも戒翔さんの事を呼び捨てにしていたみたいだが？」

「そ、そうですわ！戒翔さん、あの子とはどういうご関係で――――」

その後も俺と一夏に質問責めする箒達……って言うか此方に話題を振るな。馬鹿者共

そう戒翔が思うが既に遅く千冬の持った出席簿で騒いだ生徒達の頭がシバかれる。

――――――――――――――――――――――――

「あなたの所為ですわ！」

「お前の所為だ！」

昼休みになり、セシリアと箒は開口一番に俺に文句を言ってくる

『何故、俺に言うんだ？』

千冬の前で上の空では腹を空かした獣の前に肉を置いた状態だぞ？

「まぁまぁ、話しなら飯食いながら出来るだろ？学食に行こうぜ」

「む……確かに」

「そうですわね」

『イーニァとクリスカも一緒にどうだ？案内がてらで食堂に行くが』

「いくー♪」

「そうね、行こうかしら」

『それじゃあ、決まりだな』

そして、俺や一夏を始めとした６人で食堂に向かう。食堂に着いた俺達はそれぞれの昼食を買うために券売機に行くが箒はきつねうどんでセシリアは洋食ランチで一夏は普通に日替わりランチをたのんでいた。

『クリスカとイーニァはどうする？』

「かいととおなじのにするー」

「わたしもイーニァと同じね」

『そうか？なら、洋食ランチにするか』

そして、食券を手に並ぼうとしたら

「待ってたわよ、一夏！戒翔！」

どーんっと効果音がつきそうな立ち方をして進行方向に立っていたのは朝方、宣戦布告をしてきたツインテールの少女……鳳鈴音であった

『……取り敢えず其処をどけ、食券が出せない上に通行の妨げだ』

「う、うるさいわね、解ってるわよ」

そうして道を退く彼女の手にあるお盆にはラーメンが鎮座していた

『……伸びるぞ？』

「わ、解ってるわよ！大体アンタ達が来るのを待ってたんてしょうが！なんで早く来ないのよ！」

チラッとだけ彼女のラーメンを見た戒翔は食券を出しながら告げるが彼女はとても理不尽な事を言った

『何故急がなければならない、そもそも約束も何もしていないのにだ。そういうならば自分から出向くのが普通の筈だぞ』

「う、うぐ！相変わらず理屈を並べてで喋るわね」

『昔からだから治しようがないな、それにしても相変わらず元気そうだな』

「そういうアンタこそ何年も音信不通だったじゃない！」

『そうだったか？』

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！戒翔さん？注目の品出来てましてよ？」

大袈裟に咳き込む箒とセシリアに会話を中断せざるえなかった。洋食ランチのメニューはパスタにスープ、それにサラダである。スープの香りに食欲をそそられる

『向こうのテーブルが空いてるな。行くか』

鈴音を含めた全員に促す。後ろを見ると６人の筈がいつの間にか１０人以上の大所帯に膨れていた。移動するだけでも時間がかなり掛かってしまう

そこからすぐにテーブルに着けたのは僥倖と言えるだろう。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

一夏は丸一年振りの再開ということもあって、一夏らしくもないほどに多くの質問を投げかけていた。やはり、一年という空白の時間は長かった様だ。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！戒翔さんも関係あるようですが、まさか付き合ってらしゃいますの！？」

一夏と鈴音が話こんでいて、疎外感を感じて箒とセシリアは棘のある声で聞く……セシリアは別の件の様だが。他のクラスメイトも興味があるのか物凄く頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合っている訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だぞ？」

「……」

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

「なんなんだ？」

『……馬鹿者だな』

戒翔の言葉にその場にいた全員が心の中で同意した。

「幼馴染……？」

一夏の言葉に怪訝そうな声で聞き返していたのは箒であった。

「あー、えっとだな。箒引っ越したのが小４の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小５の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年とちょっと振りだな」

「そうなのか？」

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴音はそういうとじろじろと箒を見る。箒は箒で負けじと鈴音を見

返していた。心なしか火花が見えたのは幻なのか解からない。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

『何時まで睨み合っているつもりだ？』

「んんんっ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

言葉を詰まらせながらも怒り心頭で顔を赤くしていくセシリア。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。なにせ、戒翔に小さい頃に稽古付けてもらってたから強いもん」

ふふんといった調子の鈴音。そしてその言葉に箸の手を止め、鈴音を見て、わなわなと震えながら拳を握りしめていた。

それに対して鈴音は何食わぬ顔でラーメンを啜る。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでだけどな」

「ふーん」

『ちなみに特例で俺も一組のクラス代表だ』

「えっ、嘘でしょ！？戒翔もなの！」

戒翔の言葉に鈴音は身を乗り出す

「本当でしてよ。一夏さんはＩＳ初心者ですので学園側と織斑先生が特例としてお認めになりましたのよ？」

「もしかして、今度の対抗戦は……」

『一夏の仕上がり具合では俺が出るかもしれないな』

「そ、そう。そうだ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこかにいこうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこは去年に潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

「んー、特にないけどなぁ」

「――生憎だが、一夏は私達とＩＳの特訓があるのだ。放課後は埋まっている」

箒よ、お前の特訓とはあの擬音ばかりのアレか？

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特にわたくしや戒翔さんは専用機持ちですから？ええ、一夏さんの特訓には欠かせない存在なのです」

待て、セシリア。何故、そこで俺を引き合いに出す？

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

此方の話を全てスルーして一夏の答えも聞かずに言い切った鈴音はラーメンのスープを飲み干して、片付けに行ってしまった。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

「……戒翔」

俺に助けを求めるな、自業自得だろ

――――――――――――――――――――――

――――

～一夏ｓｉｄｅ～

「え？」

放課後に開放されている第三アリーナ。今日もセシリアと戒翔にＩＳ操縦を教わる予定だった俺は、予想外のニューカマー達に思わず間抜けな声を出していた。

「な、なんだその顔は……おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうか――」

「篠ノ乃さん！？どうしてここにいますの！？それにシェスチナさんにビャーチェノワさんまでいますの！？」

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

そうだったか？――――ああ、頼んだっけな。

「なら、他のお二方はどうなんですの！？」

「私達は戒翔に言われて来ただけだ。其方の邪魔おする積もりはない」

「戒翔さんが？」

戒翔さんが呼んだってことはあの２人も特訓に参加するのだろうか？

『――――済まない、待たせた様だな』

「かいとー♪」

『良く来たな、イーニァ』

「うん♪」

「戒翔さん、その方々も加わりますの？」

『その積もりだ。クリスカ達がどこまで行けるのか知っておきたいからな。イーニァ、クリスカ。ＩＳを展開しろ』

「はーい、おいでセラヴィー♪」

「来い、デスティニー！」

戒翔さんの言葉に応える様にシェスチナは掌を掲げ、ビャーチェノワは力強い言葉で前に腕を突き出す。

≪≪ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ≫≫

電子音声が二重に聞こえ、ＩＳ展開した時と同じ現象で体が包まれ、次に現れた姿を見た戒翔を除いたメンバーは驚きの声を上げる。

「戒翔さんと同じ全身装甲型（フル スキンタイプ）ですの！？」

シェスチナは黒と白を基調としたずんぐりとした機体で片手に持つバズーカに両肩には可動可能な二門ずつ付いた砲塔が特徴で長距離

砲戦仕様だとＩＳが初心者である俺にも解かった。そして、ビャーチェノワは白と青が基調の機体で両腰には折り畳まれた武器の様な物に肩の先端に掴む様なグリップが付いており、さらに目を引いたのはその背中にある翼でる。白式の様な可変翼の様な物でそれはさながら空の騎士を思わせるものであった。

『……ふむ、武装、機能共に従来の物とは違うな。リミッターはした方が良いな。セラヴィーはＧＮドライブの出力を５０％にカットで、ビーム兵装に障壁の出力制限でＰＳ装甲の強度変更で１００％から７０％。デスティニーも主機…ハイパーデュートリオンとＧＮドライブ複合型エンジンの出力の５０％カットにＶＬの推進ｓｙｓｔｅｍの機動力半減。ビーム兵装の出力制限にＶＰＳ装甲をセラヴィーと同じ数値に変更する位だな』

「なぜ其処までするのだ？手枷、足枷に目隠しをする様な物ではないか」

『それは仕方がないぞ？ガンダムを冠する機体は常に最新鋭の技術を盛り込んだ物で概存するＩＳとは比較にならない為に俺の機体同様に掛けるしかない。』

「其処まで違いますの？その“ガンダム”って」

『ならやってみるか？違いが解るぞ。行くぞ、８！』

≪ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ≫

戒翔さんが腕を前に出すと光が体の内から溢れ、次の瞬間には愛機のヴェルフェゴールが展開された。だけど、以前見た時とは違い真紅ではなく全てを塗り潰し、飲み込むかのような漆黒を基調とした

物になっていた。

「前に見た時とは色が違うが？」

『この色は光学兵装対策の特殊装甲で名称は“ブラッククラウド”と言う。セラヴィーやデスティニーと同じ物理攻撃に耐性を持つ傍らで光学兵器等の熱量兵器にも耐性を持たせ、熱量系統の攻撃を受ければその熱エネルギーを自身のシールドエネルギーに還元することが出来る』

戒翔さんが言うその理論は事実上ヴェルフェゴールには傷を付ける事が不可能な事を示していた。

『勿論、こいつにもリミッターが存在し、エネルギーに還元出来るのは光学兵器のみになっている』

戒翔さんの言葉に俺とセシリアに箒は安堵した。武装や機体能力のデータを見ただけでも反則級で防御面までとなると勝てる気すらしないからな……

『それじゃ、俺との1対5で行くぞ！』

「はぁ！？ちょっと待てそれでは「篠ノ乃さん、そんな悠長な事は言ってられませんわ！」……」

「悔しいですが、戒翔さんの操縦技術や身体能力（ポテンシャル）は完全に織斑先生を超えていますわ！」

そうだ。前の時間の時に千冬姉に聞いたっけ。戒翔さんはモンド・グロッソ大会の時、戒翔さんは出なかったが自分なんかまだあの人

の足元にも及ばないって。これは戒翔さんなりのハンデの積もりなんだろうな。

「クリスカ？」

「イーニァ、こっちは二機編成（エレメント）を二つに分けて遊撃が１人の組み合わせで行くわよ？イーニァは織斑と、オルコットは篠ノ乃と組んで私が遊撃で行く。あの人に勝つには兎に角チームワークがいる。まだ、私達にはリミッターが付いてないから其処が今回の鍵になるわ。後はどれだけ自分の仕事が出来るかね」

ビャーチェノワはそう言って組み合わせを決めるとコンソールを開くと武装等のチェックをシェスチナと始めてしまう。

「何ですの！？戒翔さんのご家族らしいですがあの態度はなんですの！？偉そうにし過ぎですわ！」

セシリア、お前がそれを言うのか？初対面の時にはお前のほうが酷かったぞ？

『準備は良いか？良いなら、行くぞ！』

戒翔さんはそう言いながらフルブーストで先ずは連携が儘成らないセシリアと箒の方に急接近する

「くっ！」

「そんな、速過ぎますわ！？」

『遅いぞ！』

そう言いながら腰に差したビームサーベルを引き抜きながら反対のビームサーベルの後部に接続し、アンビテクス・ハルバードにして一瞬にしてセシリアと箒の片腕をすり抜け様に斬り落とした。

「アレは流石に止められないだろ？」

「とめてみせるもん！いっけー！」

俺の隣にいたシェスチナが両肩の砲塔に手に持ったバズーカを正面に構えると発射体制に入ると緑色で極太の光が両肩からとバズーカからの光条……計5本のビームが戒翔さんに迫る。アレって大丈夫なのか？

「まだだ、はぁっ！」

「先程のお返しですわ！」

「織斑、砲撃が止み次第篠ノ乃と一緒に突撃を仕掛ける。遅れるなよ」

「お、おぅ！」

ビャーチェノワの言葉に俺はただ返事をするしかなかった。アイツはなんであそこまで的確に動けるんだ？まるで今まで戦場にいたかの様に……

『甘いぞ！この程度ではな！！』

「そんな馬鹿な！」

「なっ！？」

「そんな、在り得ませんわ！？」

俺達は様々な反応で戒翔さんの行動に驚きの声を出す。シェスチナの砲撃を戦闘機がやるようなバレルロールをしながら回避してセシリアのスターライトのビームをサーベルで斬り捨て、ビャーチェノワの砲撃は手の甲を正面に翳して薄白色の楯を発生させて防いだ。

「……やはり、一筋縄では行かないな。織斑、篠ノ乃行くぞ！」

「おぅ！！」

「はぁっ！！！」

ビャーチェノワの言葉で俺は雪片弐型を、箒は打鉄（うちがね）の長刀を構え、指示を出したビャーチェノワは

「デカいな、おい！」

身長並にある大刀を構えた。アレは確か対艦刀だっけか？データよりも実物の方がデカく見えた。先端は尖り、前身部分には柄と先端部まで空間が空いてる所に桃色のビーム刃が展開して3人で一斉に斬りかかった……

『ふむ、即席にしては良い連携だ…』

「「なっ！？」」

「ちぃっ！」

戒翔さんは一度に斬りかかって来たにも関わらず、サーベルをいつの間にか分離させて両手に持って俺とビャーチェノワの攻撃を防ぎながら箒の打鉄を肩から迫り出した隠し腕の様な物で捕らえていた。その一瞬の出来事にビャーチェノワは軽い舌打ちをして即座に離れ、俺は箒を助けに入る。

「箒を離せぇっ！！！」

『それは頂けないな……』

「！？織斑、下がれぇ！」

「えっ？」

ビャーチェノワの言葉にハッとしたが既に遅く、戒翔さんが左のサーベルを仕舞うとその掌をそのまま雪片弐型に当てた瞬間、ビーム発生デバイス付近が爆散する。そして、それに呆気に捕れていた俺に戒翔さんは容赦無い上段蹴りで吹き飛ばされ、其処で俺の意識は消えた。

～一夏ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「一夏ぁっ！？」

『さて、前衛が1人減ったな……』

「どれだけの武装を内蔵していますの！？」

「もー！かいとのいじわる！トランザム！！」

「……此方も行くわ！トランザム！！」

『おっと、セシリア受け取れ！』

「へ？「きゃぁぁぁぁぁぁっ！？」なっ！？」

戒翔の言葉にセシリアが前方を見ればかなりの速度で飛ばされる箒が目の前まで迫っていた。そんな事を余所に戒翔はイーニァとクリスカの相手をする。イーニァとクリスカの機体は赤い光の粒子により鮮やかな朱色に染まっていた。変わったのは外見だけではなかった。

「〜〜〜っ！何なんですの！？ハイパーセンサーで捉え切れませんわ！」

「あれ程の速度が出ているのにあの3人はお互いを把握していると言うのか！？」

セシリア達の言葉を余所に模擬戦と言う名の戦闘は続く

「やあぁぁっ！！」

「そこぉっ！！」

『無駄だ！後はお前達だけだ……が、トランザムまで使うのは些かやり過ぎだ。墜とさせて貰う！“ワームスマッシャー”！！！』

「くっ、イーニァ！」

「ＧＮＦ（ジーエヌフィールド）てんかい！」

クリスカとイーニァの周りの空間が揺らめく瞬間、クリスカは本能的直観に従いイーニァの名を呼び、イーニァは自機の周りを薄緑色の障壁の様な物で防ぐがクリスカは墜ちてしまう。

『チェックメイトだ』

「かいとはつよすぎだよー」

いつの間にか斬艦刀を抜いた戒翔は背後からセラヴィーの首元にその刃を突き付けていた。これで模擬戦は終了し、結果は戒翔の勝利で終わった。

## 第五話　転校生は家族！？と中国人？（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7071y/

少年の異世界戦記〜ＩＳ編〜

2012年1月10日02時46分発行